

癒し刑

作・大橋 秀和

緒方 俊文

メンタル・カウンセラー

緒方 真由美

俊文の妻

神原 和憲

セラピীর参加者

神原 恵美子

和憲の妻

上野 麻耶

セラピীর参加者

小野 田竜也

セラピীর参加者

二階 堂晋

メンタル・カウンセラー

小杉 理沙

メンタル・カウンセラー

向井 健吾

向井メンタルクリニックの経営者。

竹内 多佳子

ライター

【1】劇場・開演時刻

開場後は舞台上の携帯音楽プレイヤーから小川のせせらぎの音楽が流れている。

役者が全員、ばらばらと登場する。

コンビニ袋やペットボトルを持つなど、リラックスした様子で、思い思いにストレッチしたり、客席に話しかけたりしている。

役者Aが周囲（客席を含め）に話しかける。

他の役者は、それまでの自分の行動を続けながら、徐々に話に加わっていく。

役者A 私、すごいイラつとしたんだけど・・・さつき駅前のコンビニに、お茶買いに行つたのね。で、なんかレジの人がへんな人で・・・言っちゃ悪いけど、あんま清潔そうでもなくて、髪もボサボサで、汗もこう、ダラダラ垂らしてて。私も、わー嫌だ、と思つたんだけど、さすがに別のレジに変わるとかできないじゃない？しかたなくお茶渡したら・・・どうしたと思う？こうやって、手の平で顔を撫でてから、ペットボトル受け取るの。

全員 （口々に）えー。

役者A お金渡した時もやってたから、たぶんそういう癖なんだと思う。・・・それで、その手でしっかり飲み口のところ握られて・・・でも商品変えてくださいとも言えないじゃない？仕方なくそのまま持つて帰つたんだけど・・・もちろん洗つたよ。洗つたけど、でもなんか、お茶を手にとる度にその店員のこと思い出しちゃって、あんま飲む気にもなれなくて、さつきからすごいイライラしてんの。

全員、口々に役者Aに共感を示す。

役者B コンビニと言えばさ、最近、お酒買う時、年齢確認ボタン押さなきゃいけないじゃない。あれもイラつとくるよね。

役者C それは仕方ないでしょ。

役者B や、でも、毎日だよ？いつも帰り、同じくらしい時間に寄ってるから、店員さんも同じ人だし。だつてどう見ても俺、未成年じゃないじゃん。しかも、毎日来てるから、どう考えても俺の顔覚えてるはずなのね。なのにいつも機械的に確認求められるから、本当イラつときて。

役者C 確かにイラつとはするよね。

役者B だから「ボタン押してください」って言われたら、わざとこう、画面の端のほうを触って、押した振りすんの。で、「すみません、もう一度お願いします」って言われるんだけど、いつもiPod耳に入れて、聞こえてません、押しませんでしたってリアクションしてるから、しばらくすると諦めて店員がこうやって自分で押すから、勝つた！って思つて。

全員 ええ〜。

役者B (役者および客席を見て) え？なにこのリアクション。
役者C それはどうなの？
役者B え、だって腹立つじゃん、毎日そんな対応されたら。
役者D どっちかっていうと店員の方に同情するけど。
役者B だって元々は、店員が、客がイラっとするような対応したのが原因だよ。
役者E ちっちゃいよ。
役者B ……。

全員、役者Bを冷たい目で見る。

役者F え、じゃあ、XXさん(役者Bの名前)さんはどういう対応して欲しいんですか。
役者B だから毎回確認しなくていいでしょ。

役者C それは法律とかで決まってるじゃない？やらなきゃいけないって。

役者B ……だったらもっと、「お客さんが成人してるのは知ってるんですけどね、規則
なんで…本当、申し訳ないです」みたいな感じで。

役者C ……。

役者B ……なんか、話せば話すほど引かれてる気が。

役者C コンビニの時給でそこまで求める？

役者D そういう接客しなきゃいけないんだったら店員の方がイラツとする気がするんだ
けど。

役者B ……そういう時は、こーいう音楽でも聞いて、リラックスしてもらって。(携帯
型音楽プレイヤーの音量を上げる)

役者C うるさい。(音量を下げる)

役者E これ誰のですか？

役者G XXさん(演出家の名前)。なんか癒し系っぽい曲を集めてきたって。
役者C 全然、癒されないんだけど。

役者H あ、でも、前にテレビでやってたけど、こういう自然の音って、波動？ゆらぎ？が、
なんか、心臓の鼓動と同じみたいで。だからこーう、共鳴しあって和まされるらしい
よ。

役者B じゃあ、せせらぎの音、ガンガンにかけてたら、笑顔で和み系な接客ができんじゃ
ない。

役者C はいはい。

役者D あーでも、本当がどうか分からないけど、精神が安定する波長の光を目に当てて、
リラックスさせるって機械みたことある。

役者B マジで。

役者D 本当かどうか分からないけど。大学の時、ちょっと怪しい系のサークルの子が見せ
てくれた。

役者E 怪しいよ。

役者B いやいや。人類のテクノロジーはそこまで発達しちゃったんだよ。きっとそのうち、
誰もイラっとしない世界が訪れるから。

役者Bは音楽の音量を再び上げる。
同時に、照明変わる。
音楽カットアウト。

【2】向井メンタルクリニック・午後

二階堂と竹内が向かい合っている。
後ろに向井が控えている。

二階堂 いかがですか？

竹内 うん・・・ちよつとよく分かりません・・・。

二階堂 気分が悪かったりとか・・・。

竹内 あ、それは全然、大丈夫なんですけど・・・あんま、何か変わったとか、よく分かんなくて・・・。

向井 はつきりしろよ、チビ！

竹内 ……え・・・なんですか。

向井 なんですじゃねえよ。トロいんだよ。

竹内 あ、そうですか。

向井 (笑顔に戻って) 今、イラっとしました？

竹内 え？・・・あ、そうですね・・・イラツとしては・・・ないですね。うん、全然、嫌な風に感じませんでした。

向井 ごめんね。こうやるのが一番、分かってもらえるから。

竹内 あゝ大丈夫です。全然、嫌な気持ちになってないですから。へえゝ変な感じですね。頭では酷いこと言われてるって分かるんですけど・・・ひとごとみたいっていうか・・・なんか、遠い出来事みたいに感じます。

向井 続ければ、慣れてきますよ。

竹内 これって、どれぐらい持つんですか？

二階堂 個人差はあるんですが、長くもって、2時間くらいですかね。

竹内 もうちよつと長いといいなーって思ったんですけど。

向井 そうね。半日・・・せめて数時間、効果が持続すれば、普段の仕事とかでも使えるようになんですけど。

二階堂 薬だけで済ませようとしたら、現状、これが限界なんです。それ以上維持しようと思ったら、外科手術が必要ですね。

竹内 メンタルペース。

二階堂 そう、メンタル・ペースメーカーを入れて、脳の中からのコントロールが必要になる。

向井 その分、単に嫌な感情を抑えるだけじゃなく、記憶を刺激して、狙った通りの感情を引き出したり、強くしたりできるようになりますよ。

竹内 でも高いんですよ。

向井 私たちもね、もっと安くしたいんだけど。

竹内 なんかないよ。だって儲かってる企業のエリートは、そういうのに会社がお金出してくれるから、ストレスなくガンガン働けるわけじゃないですか。でも、本当にこういうサービスを必要としている人って、工場とか、あと接客とか介護とかの、現場で作業してる人たちだと思うんですよ。

向井 ライターも。

竹内 確かに。まず私が使いたいですよ。

向井 じゃー売れるような記事書いて、いっぱい宣伝してくださいよ。そしたらもっと安くできますから。

竹内 はい。頑張ります。

向井 それじゃ、噂のメンタルペース、ご案内しますよ。

竹内 あ、はい。(二階堂に) 貴重な体験をさせて頂いて、ありがとうございました。

向井は部屋を出て行く。

竹内は手に持ったノートを鞆に入れ、遅れてついていこうとする。

二階堂が竹内の行く手に書類の束を突き出す。

二階堂 危ない！

竹内 はあ。

竹内が書類の束にぶつかる。

二階堂 ……これが凶器なら、死んでましたよ。

竹内 え。

二階堂 人間はね、考えるより先に、感情が動くんです。何が起こっているか理解する前に、「怖い」「危ない」っていう感情が発生して、避けたり、身を固めたりする。でも、薬でマイナスの感情を抑えてるあなたは、この通り。

竹内 ……

二階堂 記事にするなら、そういうことも、ちゃんと書いてください。

二階堂は去ろうとする。

竹内 あの……

二階堂 良い記事、頼みますよ。ウチ、世間で思われているほど儲かってないですから。宣伝してください。

竹内 ……あ、はい。

二階堂は部屋の奥へと去る。

竹内はしばらく二階堂が去った方向を見た後、向井を追いかけて部屋を出る。

竹内が向井に追いついたところで照明が変わる。

【3】向井メンタルクリニック・午後

俊文を中心に、和憲、恵美子、麻耶、小野田が輪になって座っている。

俊文の後ろには小杉が控えている。

向井と竹内は【2】からの流れで、途中から入ってくる。

和憲

・・・今日は行けるかな、って思ったんです。それで、思い切って、駅の中に入ってみることにしました。・・・階段を下りるところまでは、大丈夫だったんです。でも・・・地下の奥の方から・・・なんていうんでしょう。もあって感じで風というか空気が吹いてきたんですね。それに包まれた、って思った途端、全然体が動かなくなっって・・・。

俊文

体が動かなくなっただんですね。その時、どんな風に感じられましたか？

和憲

・・・そうですね。別に、辛いとか、行きたくないとか、そういうマイナスの気持ちはなかったような気がします。ただ、体だけが、全然動かなくなっってしまったって・・・。気持的には、行かなきゃって・・・あ。

俊文

・・・どうしました。

和憲

すみません、また「やらなきゃ」って・・・。

俊文

いいんですよ。謝らなくても。和憲さんの中の「やらなきゃ」っていう気持ちはずいぶん頑固みたいですね。

恵美子

あの、すみません。私が、その日、ちょっと余計なことを言っちゃったんですよ。別に責めるとか、そういうつもりもなくて、ただふと、カレンダー見て気がついたやつたもんで、つい「お仕事休みはじめて2年たったね」って。だから和さんの・・・あ、すみません。主人の中の「やらなきゃ」が出てきてしまっって・・・。

俊文

「したい」っていう気持ちはありましたか？

和憲

「したい」っていう気持ちはもったと思います。・・・少なくとも、駅の階段下りる時は、行きたいって思っていました。

俊文

その時の気持ち、覚えてますか？

和憲

すごく楽しくて・・・全部許されているっていうか、無敵っていうか・・・。

俊文

うん。「したい」気持ちの、パワーがちよっと弱いのもかもしれませんね。

恵美子

すみません。せっかくだろいろ、やって頂いたのに。

俊文

小学校5年生の時の記憶、ですよ。ね。「したい」気持ちをつくったのは。

和憲

ええ。

俊文

「したい」気持ちのパワーは、和憲さんの5年生の時の、野球大会で優勝した時の思い出が源です。乱暴に言ってしまうえば、その時の感情を増幅して、メンタルペー

スから出ている電気信号に紐づけてるわけです。どれだけ増幅してたとしても、やっぱりね、その強さは、元の感情の大きさに依存しちゃうんですよ。なので、もしかしたら、元の感情が、ちょっと力不足だったのかもしれないですね。

和憲

どうでしょう？ここは、気持ちを切り替えて、何か別の記憶を使うことを考えてみませんか？

和憲

……

恵美子

和さん、先生もそうおっしゃって。

和憲

……うーん。おっしゃることはすごくよく分かるんですが……なんていうか、いくら振り返っても、やっぱりほかに、良かった記憶とか……思い当たらないですよね……

麻耶

……つまらない人生。

恵美子

……ほら、やっぱり、結婚式の時とか、プロポーズの時とかが、よかったんじゃない？先生もおっしゃってたじゃない？誰かと一緒に何度でも振り返られるような記憶の方がいいって。ねえ。

俊文

ええ、そうです。だからこそ奥さんも一緒に。

和憲

それはやったけど。

俊文

まあ、もう一度試してみるっていうのも。

麻耶

要はあれでしょ、この人のこれまで人生の中には、まともに生きて行くために必要なエネルギーが何もなかったってことでしょ。

和憲

……

恵美子

それは……今はちょっと元気がなくなってるかもしれないけど／＼

麻耶

いーじゃん。私たちみんな、そういう人間なんだからさ。

恵美子

……

俊文

それは、僕も同じだね。

麻耶

え。

俊文

僕も、メンタルペースをつけてるんです。

全員、驚く。